

中信高校山岳部かわらばん

編集責任者 大西 浩

大町岳陽高等学校

今年の鍬ノ峰

毎年、夏山シーズンが本格化する直前に行っていた恒例の鍬ノ峰の整備登山。大町高校から岳陽高校に変わって、伝統を途絶えさせてはならじと思っただが、私自身の忙しさにIH出場なども相俟って、できずじまいで秋を迎え、すでにシーズンも終わるころになってしまった。だが、年に一回でも作業をしないと道が笹に覆われるのは必定。生徒に声をかけて11月3日に決行した。11月2日は懇親もかねながら、学校で合宿をし、3日は早朝から作業を始めることにした。こうして、昨年7月以来1年4ヶ月ぶりとなる作業を行うことができた。



慣れない作業ではあるが、一年生も含め部員みんな協力しての作業の結果、笹に覆われた登山道は立派な登山道へと変貌した。せっかくリニューアルした登山道だが、これからは来る人も稀な静かな冬を迎える。



この鍬ノ峰については、長野県山岳遭難防止アドバイザーでもある中嶋豊さんがこの夏に信濃毎日新聞より発刊した「信州山歩き地図の第4巻里山編（中信・南信）」の冒頭で紹介されており、解説の中には生徒の今年の整備の様子も掲載されています。興味のある方はぜひ、書店で手に取ってご覧ください。

登山外来へようこそ 大城和恵著（角川新書）

著者の大城和恵さんについては今更紹介する必要もないだろう。日本人初の国際山岳医として、その八面六臂の活躍は今や山関係者で知らないものはいない。

札幌の病院で登山外来を開設している大城さんは、そこを訪ねてくる人に治療だけでなく救助隊や遭難した人から学んだことなど、様々なお話をすることで、少しでも遭難を減らしたいという思いを実践しておられるということだ。「登山外来へようこそ」というのは、そこを訪れることのできない人たちにもこの思いを伝えたいということで、付けられたネーミングだそうだ。

第1章には、実際に救助隊や診療所（富士山や北アルプス）での医者としての経験から導き出された様々な提言がある。助かる命を無駄にしてほしくない。そんな声に率直に耳を傾けてほしい。2章3章は登山者が身につけておくべき医療の知識とファーストエイドが分かりやすく説明されている。高校山岳関係者ならば当然お気づきと思うが、今年、高体連の登山部報の「登山の医学——予防とファーストエイド」について、大城先生にお願いして書き下ろしていただいた。そのとき、僕が大城さんへの窓口となった

が、唐突でぶしつけな依頼であったにもかかわらず、大城さんは若い人たちのために役に立つことならということで、この仕事を全く躊躇なく快く引き受けてくださった。32ページにも及ぶそれは、最新の状況が盛り込まれた中身のあるものとなった。この本の第2章、第3章と合わせて読むことで、より理解が深まる。その意味では高校山岳部の生徒、また顧問にもぜひ読んでほしいと思う。

4章では国際山岳医という未知の分野をパイオニアとして切り開いてきた大城さんご自身のこと、そして5章は三浦雄一郎エベレスト登山隊の同行ドクターとしての思いが語られる。大城さんが次の世代への「恩送り」で書いたというこの本を多くの人に受けとめていただきたいと思った。

山の天気だまされるな 猪熊隆之著（ヤマケイ新書）

本書の著者、猪熊さんの前著「山岳気象予報士で恩返し」については、かわらばん506号でご紹介した。その猪熊さんが専門の立場から、気象遭難について自らの仕事の様子を紹介しながら興味深く語ってくれたのが本書である。まず、現在の天気予報の仕組みとその盲点を明らかにし、気象情報を鵜呑みにする危険性を指摘する。そのうえで、猪熊さんは気象遭難をなくすための13か条を提言している。その具体的な手立てとして、事前に地図をしっかりと読み、目的の山域の地形からどのような気象を予測できるかをシミュレーションし、引き返すポイントを考えておくことが最も重要だとし、計画段階での読図の重要性を説く。それがあってはじめて現地での判断も生きてくるのである。

続いて、典型的な気象遭難である「低体温症」「増水」「落雷」「突風」をとりあげ、過去の実際の遭難事例をケーススタディとして検証する。低体温症は2012年5月4日の小蓮華岳での事故、増水は2014年8月15日の大雨による赤木沢での事例、落雷は1967年8月1日西穂高岳で松本深志高校の11人が死亡した事故、突風は1993年11月26日富士山での当時中央大学のメンバーだったご自身の体験を、それぞれ地図を詳細に検討しながら事故が起きた時の分岐点がどこにあったのかを詳細に分析する。僕自身、地図を読むことはこれまでいろいろなところで、力説してきたし、計画立案は地図読みにはじまり地図読むに終わるという考えをもっている。そこに「気象の目」を加えることで、さらにリスクマネジメントが補完される。

私事であるが、「低体温症」「増水」の事例のときと同じ日に僕も山にはいっており、小蓮華のときは全く同じ山域に（かわらばん450号、451号参照）、増水の際は裏銀座（519号参照）で、実際にどのような行動をとるかを迫られた経験がある。そのときは、いずれも予定の行動を変更して行動した。つまり、このときは引き返しポイントで適切な行動をとれたということになる。

もう一つ私事だが、松本深志高校は私の母校でもあり、当時はまだ小学生だった僕にとって幼いながらも記憶の中に刻まれている事故である。この事故については事故の2年後に詳細な事故報告書が出されており、事故の際に救助の中心になって動いたのが僕の高校時代の担任だったこともあり、先生から常々その当時のことを聞かされてもいたので、単なる興味を越えて読ませていただいた。

自分自身に引き寄せて書きすぎたきらいはあるが、猪熊さんが再三強調しているのは、計画段階の重要性だ。そしてそれをするのが、安全登山、さらに自然との一体感や山の楽しみにつながる。天気図と読図の関係をこんなに明確に書いてくれた本は貴重です。